北海道におけるアウトドア観光の現状

～アウトドアアクティビティの道内分布～

The present status of outdoor tourism in Hokkaido
~ The distribution of Outdoor activities in Hokkaido ~

原田雄太郎※
HARADA, Yutaro

北海道において自然を生かしたアウトドア観光を推進すべく行政も「北海道アウトドア活動振興条例」を制定している。しかしながら、近年の調査報告に基づけばアウトドアアクティビティを体験する観光客が多いとはいえず、また、道内においてどこでどのようなアクティビティが行われているか整理されていないのが現状である。そこで、本稿ではアウトドア観光発展の基礎資料とすべく道内のアウトドアアクティビティの分布をまとめた。

キーワード：アウトドア観光、道内分布、観光マーケティング

１．背景と目的

北海道への訪問者数は 2013 年以降、5,000 万人台で推移している。また観光 GDP は 6,320 億円となっており、北海道の基幹産業である第 1 次産業の 5,527 億円を超える規模になったことが報告されている[1]。つまり北海道経済にとって観光は非常に重要なわけであるが、同時に様々な課題も指摘されている。

デービッド･アトキンソンは観光には気候、自然、文化、食事の 4 条件が必要だとしている[2]。同氏の主張はインバウンドを前提に展開されているが、北海道にとっては国内観光だとしても道外からきてもらう点で考え方に相違はないといえよう。特に自然という点で、北海道においてはアウトドアアクティビティが各地で提供されている。北海道としても 2001 年に「北海道アウトドア活動振興条例」を制定し、ガイドや事業者の認定を行うことで育成を図り、アウトドア観光の振興､そして体験型観光の振興によって滞在型の観光地づくりを目指している。しかしながら、観光客の動向に関する北海道の報告をみるかぎり必ずしも観光客のアウトドアアクティビティ利用が多いとはいえない。4 つの条件を存分に生かして今後北海道が観光地としての魅力をより高めていくために、自然を生かしたアウトドア観光の発展が重要な役割を果たしうる。

ただアウトドア観光を発展させるためには、北海道における観光全体の状況と対比しながらアウトドア観光の現状を把握していく必要があろう。しかしながら北海道のアウトドア観光については、そもそもどこでどのようなアクティビティが提供されているのか整理されていない。そこで本稿では①北海道観光におけるアウトドアの利用状況、②どこでどのようなアクティビティが行われているのか整理する。そして以上の 2 点を通して北海道におけるアウトドア観光の現状を

※日本農業経営大学校

把握することを目的とする。

２．研究方法

北海道の観光全般および、アウトドア観光の利用状況に関しては各種調査報告書をもとに整理した。道内のアウトドアアクティビティについては、場所とアクティビティの種類を調査しまとめた。調査はインターネットを用いて、北海道の体験観光を紹介しているサイト「北海道体験.com」において、アウトドアアクティビティを提供している事業者の一覧が掲載されているページから、各事業者それぞれのホームページを調べ、提供しているアクティビティの場所と内容についてまとめた。なお、「北海道体験.com」は道内の体験事業についてかなり幅広く紹介しており、また他に道内のアウトドアアクティビティをまとめて見られる資料やホームページもないことからまずは同サイトを活用した。

３．北海道観光におけるアウトドア観光の現状

3－1. アウトドア観光の定義

本稿でテーマとしているアウトドア観光であるが、まずはそれがどういった観光であるのか確認しておきたい。アウトドア＋観光ということになろうが、観光は余暇あるいは自由時間の中で日常生活圏を離れて学んだり遊んだり（レクリエーション）することと考えてよいだろう[3]。その学びや遊びの内容がアウトドアであることがアウトドア観光といえよう。

では、アウトドアでの学びや遊びということであるが、濁川（2014）はアウトドアアクティビティとは「自然環境を背景に営まれる諸活動の総称」であり、諸活動とは「①冒険や競争への欲求、②収穫や作業への欲求、③娯楽、遊び、コミュニケーションへの欲求、④調理や火を使うことへの欲求、⑤創作や芸術への欲求、⑥癒やしや生き物との触れ合いを求める欲求、⑦宗教や学び、洞察への欲求などに基づいて行われる活動」とする星野敏男氏の定義を紹介している[4]。また、文部科学省による「青少年の野外教育の充実について」（1996）という報告では、広い意味での自然体験活動として「自然の中で自然を活用して行われる各種活動であり、具体的にはキャンプ、ハイキング、スキー、カヌーといった野外活動、動植物や星の観察といった自然・環境学習活動、自然物を使った工作や自然の中での音楽会といった文化・芸術活動などを含んだ総合的な活動である[5]」と捉えている。これは体を動かす活動だけではなく文化的活動も包含しており、星野の見解と同じである。そして「北海道アウトドア活動振興条例」においては、アウトドア活動を「自然の中で、自然の恵みを受けながら、自然とふれあうために行われる野外活動[6]」としている。したがって観光の定義とこれらアウトドアに関する活動の定義を踏まえ、本稿にいてはアウトドア観光を「余暇時間の中で日常生活圏を離れて、自然環境の中で、自然を活用して行われる各種の学びや遊び」と広い意味で捉えることとする。

3－2. 北海道観光の現況－どこから誰がきてどこへ行くのか－

本節では、北海道にどれくらいの人がどこから来て、何をしているのかをみることで北海道観光の現況と特徴を明らかにしたい。

北海道の観光入込客数は 2015 年度の 5,477 万人が最高値で、2016 年度は 5,466 万人となっている。2016 年度では 5,466 万人中 230 万人が訪日外国人旅行者、594 万人が道外客、残りの 4,642

万人が道内客である。全体としては増加基調であり、その中でも外国人客の増加が著しい一方、道外客は伸び悩み傾向であることが伺える。以下において、2016 年度版の「観光動態・満足度調査報告書」にもとづき道内客、道外客、外国人客とそれぞれ特徴をみていきたい[7]。

道内客の回答者の居住地については 45.4%が札幌市、次いで 5.4%で函館市、以下旭川市、帯広市と続いていくが、居住人口の多さに比例して札幌市が約半数となっている。日程については日帰りが 42.7%、1 泊 2 日が 31.4%となっておりこの両者で約 4 分の 3 を占めている[8]。

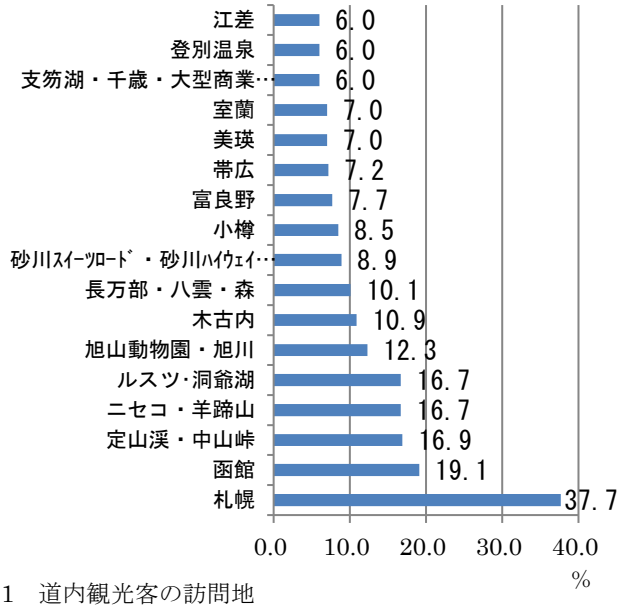

図 1　道内観光客の訪問地

資料　北海道経済部観光局「観光客動態・満足度調査報告書」2017 年

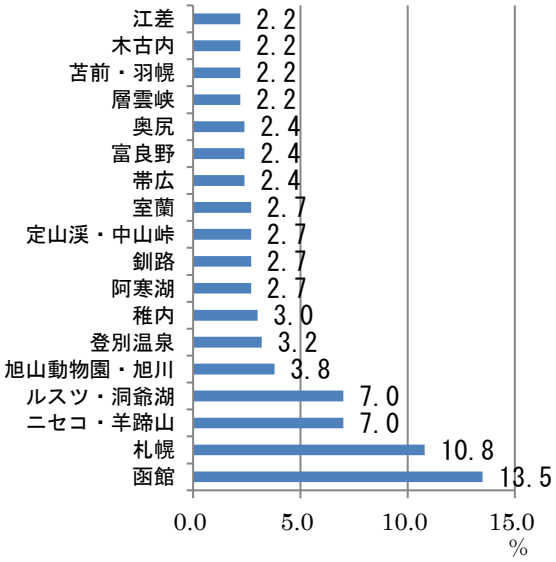

図 2　道内観光客の宿泊地

資料　図 1 に同じ

訪問した観光地と宿泊した観光地を比べると、函館には宿泊をともなって訪れる人が多いといえる。定山渓・中山峠、ニセコ・羊蹄山方面も訪れる人が多いが、宿泊するのはその内の半分弱である（図 1、図 2）。

道外客の回答者について、居住地としては 48.8%が関東、次いで 17.2%が近畿、11.1%が東海であり、総じて半分弱が関東からとなっている。宿泊数は 2 泊 3 日が 38.5%で最も多く、次いで 3 泊 4 日が 24.6%となっている[9]。

訪問した観光地と宿泊した観光地を比較すると、道外客は札幌に宿泊しながら札幌や小樽を観光する割合が多いと推測される。函館も宿泊を伴いながら訪れる割合が多いといえる。このことは飛行機を利用して北海道を訪れる人の約 60%が新千歳空港、10%が函館空港を利用していること、また観光周遊ルートも道央圏のみが 27.8%、道南圏が 11.3%であり、圏域をまたがって周遊する割合が少ないことからも妥当といえよう[10]。道内客と比べると旭山動物園・旭川、富良野を訪れる割合も高くそれに伴って宿泊の割合も高い。一方で、ニセコ・羊蹄山、定山渓・中山峠はあまり訪問・宿泊されていない（図 3、図 4）。

道外客の傾向としては、新千歳空港を利用して来道し札幌に宿泊して札幌およびその近辺の道央圏で観光するという札幌集中の傾向が強いものの、函館、旭山動物園・旭川、富良野にも足を運ぶような旅行を行っているといえよう。

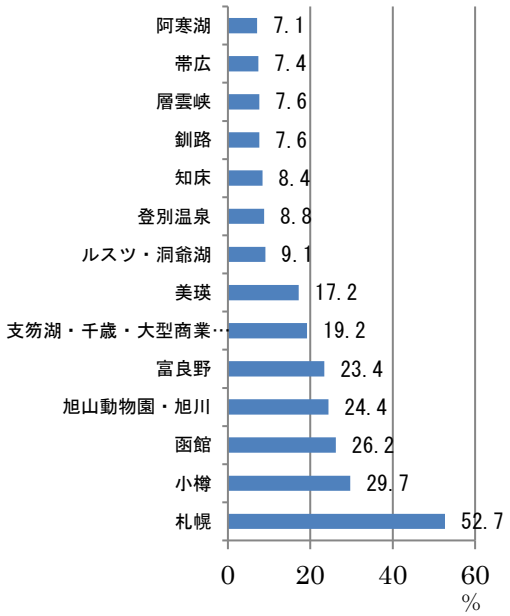

図３　道外観光客の訪問地

資料　図１に同じ

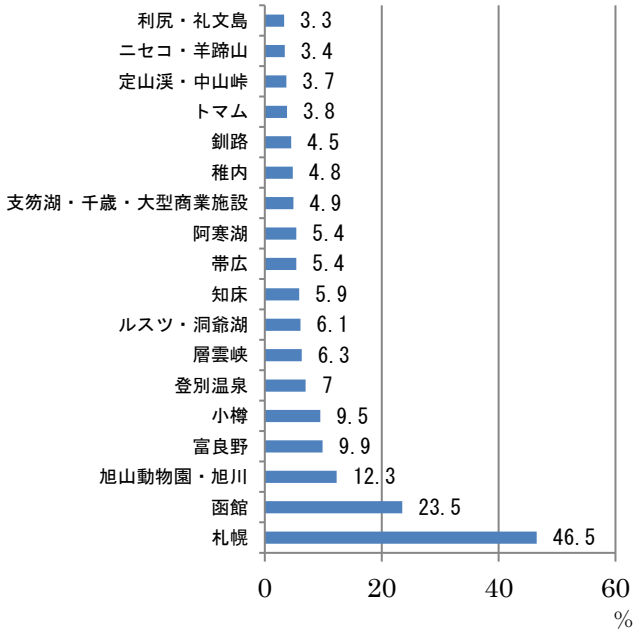

図４　道外観光客の宿泊地

資料　図１に同じ

外国人観光客の回答者の居住地は、36.7%が台湾、24%が中国、12.7%が韓国、8.6%が香港と続いている。2015 年度の「北海道入込観光客数調査」の結果と比べても大差なく、北海道を訪れる外国人客の平均的な比率と考えてよかろう。彼らの宿泊数は 34.1%が 4 泊 5 日、5 泊、6 泊 7 泊とそれぞれ 15%前後となっている。北海道における外国人客はアジア圏から 4～6 泊ほどの日程で訪れているパターンが主流と考えてよいであろう[11]。

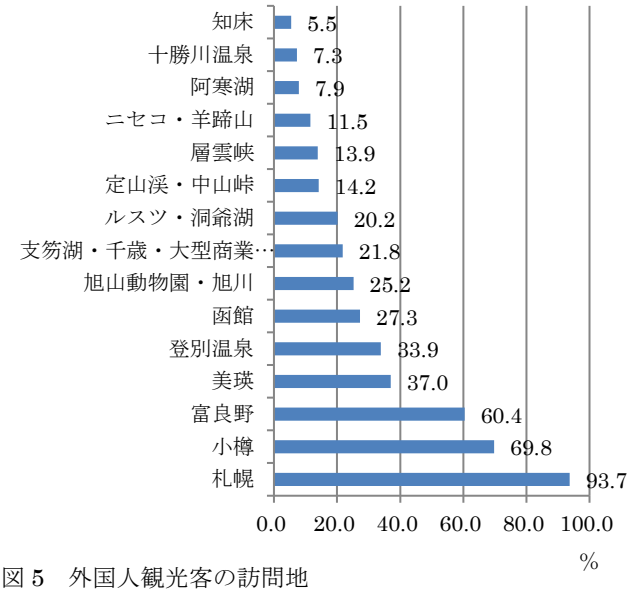

図５　外国人観光客の訪問地

資料　図１に同じ

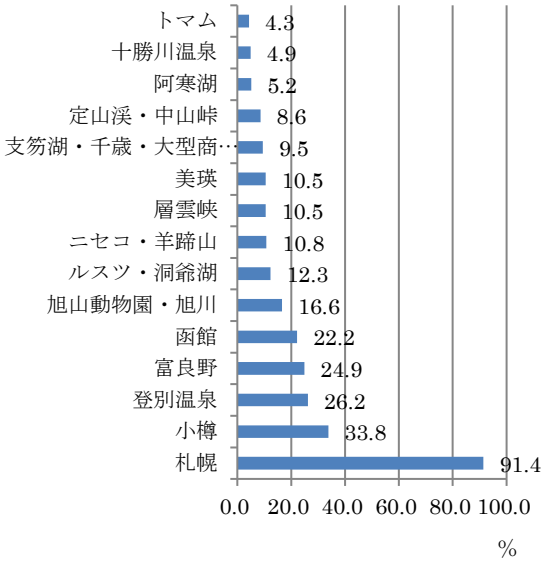

図６　外国人観光客の宿泊地

資料　図１に同じ

訪問した観光地と宿泊した観光地では、やはり札幌は必ずといってよいほど訪れ宿泊している。小樽についても道外客同様に訪れ宿泊する割合が高い。道外客と比べると登別温泉への訪問・宿泊が多く、函館よりも高い割合となっている。富良野や美瑛は訪問地としての人気が高いことが伺える（図 5、図 6）。観光周遊ルートとしては、道央圏→道北圏→道央圏が 23.1%、道央圏に留まるのも 17.1%の割合となっており、道央を中心としつつ道北圏に足を伸ばすようなパターンが中心を占めているといえる[12]。

3−3. アウトドア観光の利用状況

道内客、道外客、外国人客それぞれ札幌を中心に観光していることがわかったが、具体的にはどのような内容であろうか。3 者を比較すると外国人客は自然観賞、都市観光、買物・飲食、ショッピング、温泉保養が目立つ。道外客も都市観光と自然観賞、買物・飲食、温泉保養が高い割合となっている。一方で道内客は温泉・保養は道外客と同じぐらいの割合であるが、道の駅めぐりやドライブといった項目が高い割合となっている。

一方でアウトドアに関しては軒並み低い割合である。乗馬・ラフティングなどのアウトドア体験は道外客の 2.3%が最高で、その他にキャンプ・ハイキング、サイクリングと各種アウトドア関係の項目があるが、どのアクティビティも 3 者とも低い割合である。総じて、北海道の観光では札幌を中心とした都市観光をはじめショッピングやドライブ、温泉が楽しまれる傾向が強く、またアウトドア体験ではなく自然観賞という形で北海道の自然を楽しんでいるのが現状といえる。

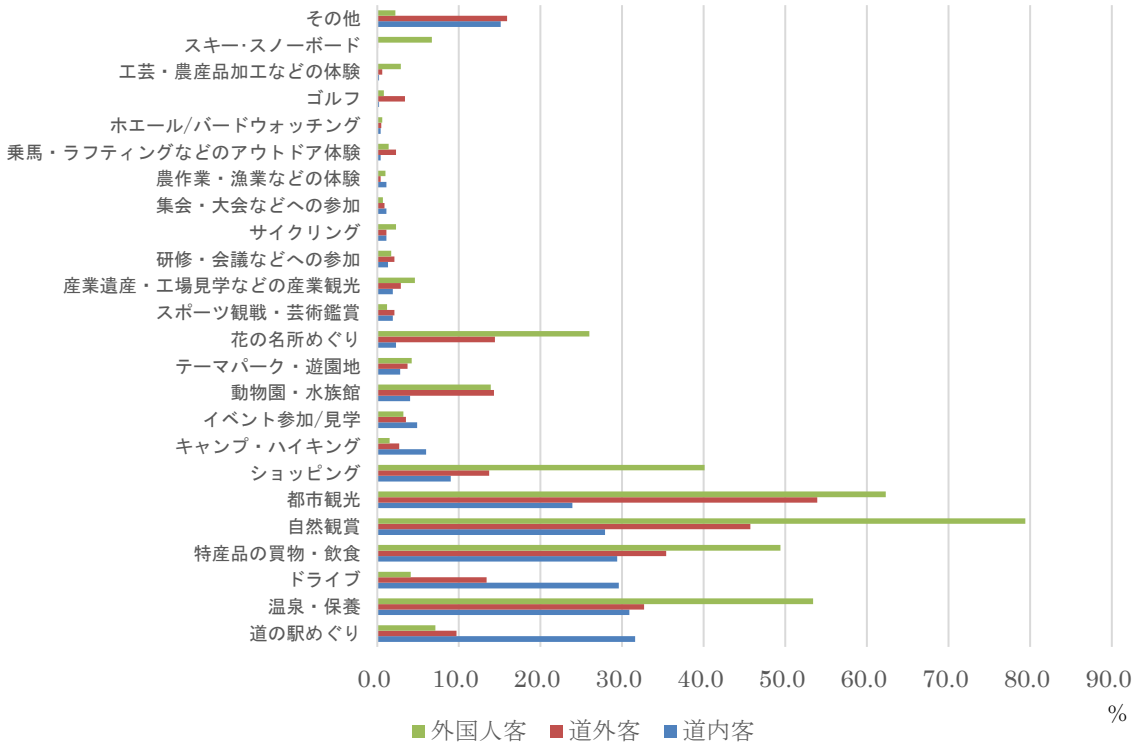

図 7　北海道観光における旅行の内容

資料　図 1 に同じ

3－4. 北海道観光の課題とアウトドア観光の意義

現状、道外や外国人観光客は新千歳空港を起点に札幌を中心としながら都市観光や、小樽や旭川・旭山動物園、あるいは富良野方面を周遊するという形、「札幌ハブ観光」が大きな割合を占めている。自然資源を生かした観光も、アウトドアの利用は少なく、景勝地見学などの自然観賞に留まっている。

同時に北海道観光の課題はいくつか出されているが、とりわけ「札幌ハブ観光」ではなく道東、道北といった方面にも観光客を展開させることが挙げられる。そのためには交通網などの整備は当然大事であるが、何よりも札幌圏以遠の魅力が訪れるに足るか、つまり観光客のニーズを捉えているかが大切である。そしてその上でそれを供給できるのかといったことも考えなくてはならないであろう。

ただ、北海道の魅力として自然は非常に重要で、北海道を旅行先に選ぶ理由では「自然風景が素晴らしい」という期待・評価が圧倒的である（図 8)。そしてアウトドアアクティビティは次章でみるように道内各地で多様に提供されており、札幌から道内各地に観光客を展開させる可能性をもっていると考えられる。

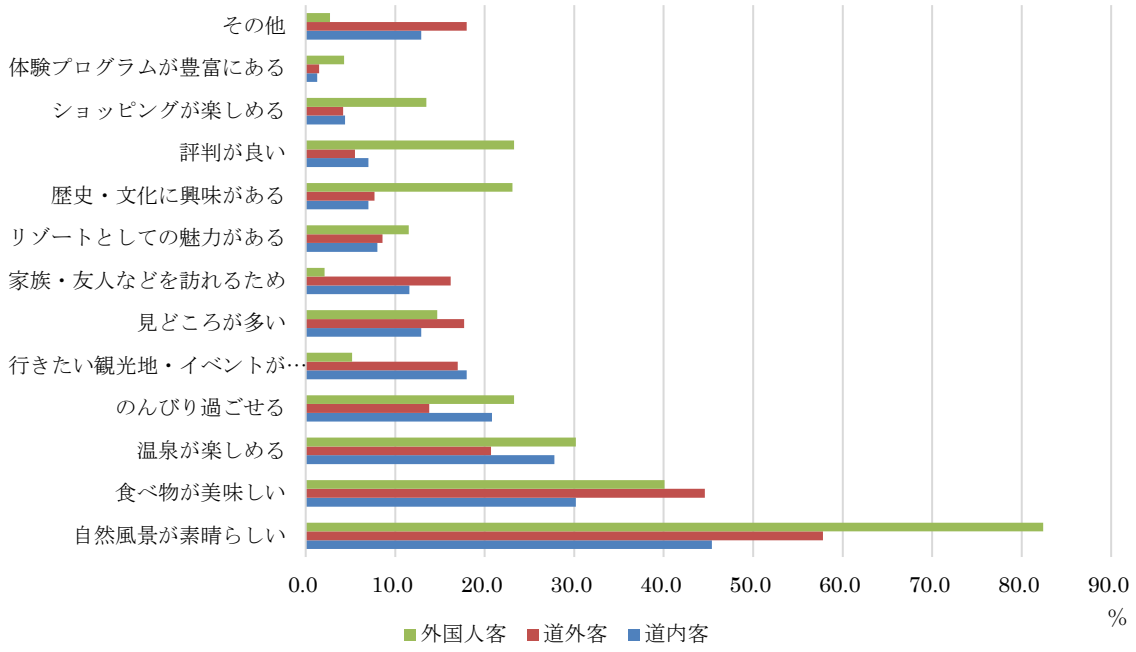

図 8　北海道旅行において旅先を選んだ理由

資料　図 1 に同じ

4．北海道におけるアウトドアアクティビティ

4－1. アクティビティの種類とエリア分け

北海道のアウトドアアクティビティを調べるにあたり「北海道体験.com」に掲載されている事業者 223 社の各ホームページを見て、それぞれのアクティビティを調べた。体験も様々あり、ステンドグラス作りなどのインドア体験のみを提供している事業者は除外した。また、ホームページが閲覧できなくなっている事業者も除外した結果、対象となった事業者は 200 であった。

アクティビティの分布に際しての種類とエリア分けを明確にしておきたい。アクティビティの

種類については、北海道アウトドアガイド資格制度にもとづけば 6 種類（山岳ガイド夏山・冬山、自然ガイド、カヌーガイド、ラフティングガイド、トレイルライディングガイド）となるが、本稿では 13 種類とした（図 9）。

エリアについては、オホーツク、釧路、十勝、富良野、ニセコ、函館の 6 つを基本とし、該当しない場所はその他とした。道北、道東、道南、道央の 4 つでは区分が広すぎてアクティビティの特徴を捉えることができない。例えば道東と一括りに言っても十勝エリアと釧路エリア、そしてオホーツクエリアではアウトドアアクティビティの内容に差異もある。

4−2. アクティビティの分布

道内のアクティビティ数は 13 種類でいえば 304 であった。ただし、13 種類以外のアクティビティも 100 以上あった。以下エリアごとに見てみたい。

オホーツクエリアではアクティビティ数は 29 であった。中でも知床関連のネイチャーツアーが多いのが特徴といえる。また、その他のアクティビティとして流氷ウォークが 2 件確認でき、流氷を観光資源としてかかえるオホーツクエリアの特徴がでている。

釧路エリアはアクティビティ数が 48 で、その内カヌーが 17 件と道内でも随一のカヌーエリアとなっていることがわかる。同時にネイチャーツアーや冬のスノートレッキングも盛んに行われているのも特徴的である。釧路湿原、釧路川を資源とした観光が展開されているといえる。

十勝はアクティビティ数が 45 で、乗馬やカヌー、登山、ネイチャーツアーなどそれぞれの数としてはどれも他の地域と比べて飛び抜けて多いものはないがバランスよく様々なアクティビティが提供されている。また、農作業体験は他の地域より多めで農業エリアとしての特徴も出ているといえる。

富良野はニセコに次いでアクティビティ数が 51 と多い地域であり、乗馬やネイチャーツアー、つりといったものがバランスよく提供されつつラフティングやカヌーやラフティングなどが多くなっている。

ニセコはアクティビティ数が 55 で道内では最も多い地域となっている。内容としてもカヌーやラフティング、キャニオニングなどのリバーアクティビティの他、バックカントリーやスノートレッキングなどの冬ならではのアクティビティも多い。ニセコの豊富な雪を資源とした観光が展開されている。

小樽や道南・函館方面ではアクティビティ数はそこまで多くないが、小樽ではシーカヤック、函館では乗馬などが提供されている。

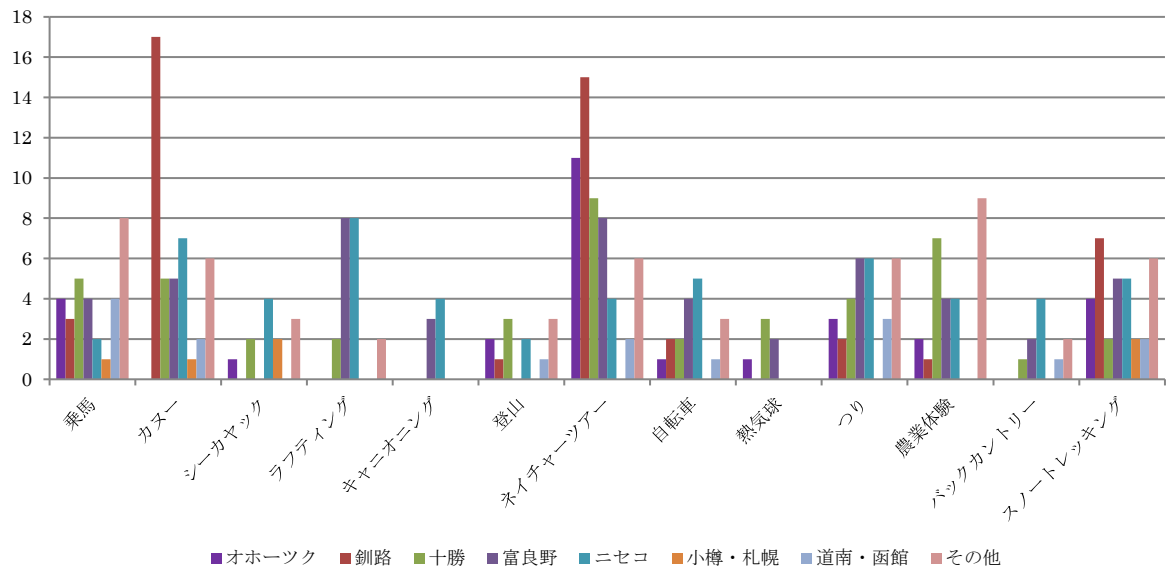

図 9　各エリアのアクティビティ数

資料　北海道体験.com ホームページ（最終閲覧 2018 年 4 月 30 日）

５．結語

北海道におけるアウトドア観光として主なフィールドは釧路、十勝、富良野、ニセコとなっている。また、カヌーやラフティング、ネイチャーツアー、農作業体験などで構成され、オホーツクエリアも知床でのネイチャーツアーや流氷ウォークなど個性的なアクティビティを含め道内には多くのアクティビティが存在していることがわかった。

これらのアウトドアアクティビティを提供する事業者がおり、それを楽しんでいる観光客は一定数いるものの、本稿で参考にした各種の調査報告に基づけばその数は多いとは言えない。しかしながら冒頭に定義したように、アウトドア観光を「余暇時間の中で日常生活圏を離れて、自然環境の中で、自然を活用して行われる各種の学びや遊び」と捉えればその裾野はもっと広くてよいはずである。特に北海道観光の内容の中でも群を抜いて多い「自然観賞」をどう捉えるかは重要で、ただ単にドライブがてら湖沼を見学するものから、星空観察のように自然環境下における遊びや学びの色合いが強いものまで考え得る。したがって、北海道におけるアウトドア観光の現状をより細かく把握するためには、アウトドアアクティビティの体系的な整理を行いつつ、各エリア、各アクティビティの利用者の現状を分析することが必要であり今後の課題としたい。

北海道観光の中でも期待値の高い自然であるが、上記課題に取り組むことで、観光客が全道をフィールドとして自然をさらに楽しめることにつなげていければ、札幌圏を中心とした現在の観光形態から脱却し、その経済的恩恵を地方にもたらすことも期待できる。

また、アウトドア事業者やアクティビティの数もおそらくもっと多いことも想定され、同時に各事業者の経営形態なども株式会社から個人事業主まで、そして中には兼業でアウトドア事業を行っているなどかなり多様であると想定される。この点も引き続き調査研究をすすめていきたい。

【注】
[1] 北海道経済部観光局（2017）「第 6 回北海道観光産業経済効果調査」p.1
[2] デービッド・アトキンソン（2015）『新・観光立国論』p.56
[3] 観光の定義に関していくつか参考にすると、社団法人日本観光協会によるものでは、「自由時間の中で生活の変化を求める人間の基本的な欲求を満たすための行為のうち、日常生活圏を離れて異なった環境のもとで行われる行動」とある。あるいは、1995 年の政府の観光政策審議会においては「余暇時間の中で日常生活圏を離れて行う様々な行動であって、触れ合い、学び、遊ぶということを目的とするもの」としている。（須田寛（2006）『新しい観光－産業観光・街道観光・都市観光－』、交通新聞社、p.12）また、岡本（2001）はわが国で最も引用されている定義として井上万寿蔵による「人が日常生活圏を離れ再び戻る予定でレクリエーションを求めて移動すること」という定義を紹介している。（岡本伸之編（2001）『観光学入門－ポストマスツーリズムの観光学』、有斐閣アルマ、p.4）
[4] 濁川孝志（2014）「アウトドア･アクティビティによるウェルネスの醸成－現代社会におけるアウトドア･アクティビティの意義を考える－」『立教大学コミュニティ福祉学部紀要第 16 号』p.79
[5] 文部科学省（1996）「青少年の野外教育の充実について」
（http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/nc/t19960724001/t19960724001.html）
[6] 北海道（2001）「北海道アウトドア活動振興条例」
（http://www.pref.hokkaido.lg.jp/kz/kkd/500-outdoor/outdoor-jyourei.htm）
[7] 本調査は北海道経済部観光局が株式会社道銀地域総合研究所に委託して行われたものである。調査期間は 2016 年 6 月～2017 年 2 月で調査員による対面調査とウェブアンケートによって行われた。アンケート回収数は道内客 1,117、道外客 4,167、外国人客 1,727 である。
[8] 北海道経済部観光局（2017）「観光客動態・満足度調査報告書」p.21,26
[9] 「同上」p.62,68
[10] 「同上」p.73,80
[11] 「同上」p.109,116
[12] 「同上」p.143

【参考文献】
デービッド･アトキンソン（2015）『新・観光立国論』東洋経済
須田寛（2006）『新しい観光－産業観光・街道観光・都市観光－』交通新聞社
岡本伸之編（2001）『観光学入門－ポストマスツーリズムの観光学』有斐閣アルマ

【参考資料】
北海道（2018）「北海道アウトドア活動振興推進計画」
北海道経済部観光局（2017）「第 6 回北海道観光産業経済効果調査」
北海道経済部観光局（2017）「観光客動態・満足度調査報告書」
公益社団法人北海道観光振興機構（2014）「北海道旅行者に対するマーケティング調査報告書（概要版）」
北海道（2001）「北海道アウトドア活動振興条例」
文部科学省（1996）「青少年の野外教育の充実について」

【参考ホームページ】
北海道体験.com（http://h-takarajima.com/　最終閲覧 2018 年 4 月 30 日）

（査読論文2018 年4 月30 日受理）